

雨情民謡百篇

野口雨情

青空文庫

民謡は民族が有する唯一の郷土詩である。郷土詩を無視して民謡の存在はない。民謡は草土の詩人によつてうたはれる、純情芸術である。

本書は「かれくさ」（明治三十八年発行）以後の小著中より採録した作品と未発表の作品とを加へて百篇としたが必ずしも自選集の意味ではない、自分が二十数年間辿つて来た道程の記録である。

又、一二節外律によらざる作品も加へたのは思ふところがあつたからである。

大正十三年六月

著者

紅殻とんぼ

とんぼ来るかなと

裏へ出て見たりや

とんぼ飛んで来て

釣瓶つるべにとまる

とんぼ可愛かはいや

紅殻べにがらとんぼ

赤い帯なぞちよんと

締めて来る

橋の上

橋の上から

小石を投げた

小石ヤ浮くかと

川下見たりや

小石ヤ沈んで

流れてぐ

捨てた葱

葱^{ねぎ}を捨てたりや
しをれて枯れた

捨てりや葱でも
しをれて枯れる

お天^{てんたう}道さま見て
俺^{おら}泣いた

二十三夜

二十三夜^やさま
まだのぼらない

麦鍋あぶくアみろり囲爐裡で
泡立あぶくつてる

とろとろ とろりちけえ
眠くなつて来た

門司にて

門司へ渡れば

九州の土よ

土の色さへ

おぼろ月夜してる

土もあかるい
あかるい土よ

人もあかるい
あかるい顔よ

遠い常陸は
わたしの故郷

なぜに暗いだろ
故郷の土よ

暗い土でも
常陸は恋し

竹藪

背戸の竹藪で

竹伐^きつてゐたりや

雀ヤ飛んで来て

啼いてからまつた

よいとまけの唄（掛合唄）

音頭とり「よいとまきすりや

綱引き「この日の永さ

音頭とり 「たのみましたぞ

綱引き 「音頭おんどうとりさんよ

音頭とり 「唄が切れたら

綱引き 「唄つ続つぎやしやんせ

音頭とり 「寝てて暮らそと

綱引き 「思ふちやゐぬが

音頭とり 「杭の長さよ

綱引き 「お天てんたう道さまよ

音頭とり 「唄で引かなきや

綱引き 「どんと手に来ない

夜あけ星

夜明お星さま

一つかや

宵に出た星ヤ

どこへいつた

天さのぼつたか
潜むぐつたか

眼子菜

蛙鳴かはづくから

沼へいつて見たりや

沼にや眼ひるも子菜の

花盛り

沼にや眼子菜の

花盛り

蛙ア眼子菜の

蔭で鳴く

朝霧

夜あけ千鳥ぢや
あの啼くこゑは

帰りなされよ
お帰りなされ

川の浅瀬にや
朝霧立ちやる

霧は浅瀬の
瀬に立ちやる

青いすすき

青いすすきに

螢の虫は

夜の細道 夜の細道 通かよて来る

細いすすきの

姿が可愛ネ

細い姿に

こがれた螢ネ

夏の短い

夜は明けやすい

夜明頃まで 夜明頃まで 通て来る

粉屋念仏

「粉屋念仏」踊る子は
帰る

若い娘は

まだ帰らない

スタコラサ

スタコラサ

月も夜明にや
山端へ帰る

寝ぼけ月なら
帰らない

スタコラサ

スタコラサ

波浮の港

磯の鵜うの鳥ヤ

日暮れに帰る

波浮はぶの港にや

夕焼け小焼け

明日あすの日ひより和は

ヤレ ホンニサ

凧なぎるやら

船もせかれりや

出船の仕度

島の娘達ヤ

ごぢんか
御陣家暮し

なじよな心で

ヤレ ホンニサ るるのやら

海の遠く

海の遠くの離れた島で

かはい小鳥がうたふ歌聞ゆ

海の遠くを毎日見ても

島も見えない小鳥もゐない

島は見えずも小鳥はゐらずも

かはい小鳥がうたふ歌聞ゆ

誰も知らない遠くの島で

かはい小鳥がかはい歌うたふ

洪水の跡

洪水の跡に

コスモス咲き

赤い蜻蛉とんぼが

とまつてゐる

赤い蜻蛉よ

旅人は

どこまで行つた

謎

わたしや恥かし

喜蔵きざうさんの謎が

枝垂柳の謎ばかり

かける

解けと言ふたとて
解かりよか 謎よ

これさ 喜蔵さん
かけずにおくれ

はぐれ鳥

鳥 啼くから

出てみりやゐない
お母^{つか}さんよ

わたしや鳥に
だまされた

だまされた

はぐれ鳥だ

だました 鳥

お母さんよ

鳥ア啼いても

もう出ない

もう出ない

窓

夜になるとお月さんは

窓に来た

そーツと窓から

覗いてる

お月さんは しばらく
来なくなつた

闇夜の夜ばかり
続いでる

今朝^{けさ}見りやお月さんは
ぽツと出てた

有明お月さんに
なつてゐる

日永

土に物問うた

畑の土に

土が物言うた

畑の土が

ひなた
日南ぼつこして

みたよと言ふた

お茶師

ぼけ
木瓜の花咲く
ひより
日和は続く

お茶師ちやしや来るのも
もう間はなかる

裏の畑の

茶の樹を見たりや

雀アならんで
とまつてる

大洗沖

鹿島灘越しや
船玉さまよ

アレサ マア
おほあらひ
大洗沖の
アレサ マア

隠れ御礁おんねの
磯いそが鳴る

草刈り娘

わたしや田舎あなの

草刈り娘

草は千駄せんだん

刈らなきやならぬ

ザツクリ ザツクリ

ザツクリサ

草の千駄

夜明のんのの星

わたしや思はぬ

日とてない

ザツクリ ザツクリ

ザツクリサ

金雀枝

金雀枝えにしだの花咲く頃は

ほととぎすが啼く

ほととぎすが啼く

故郷ふるさとの森の中にも

もう 金雀枝の

花咲く頃か

ほととぎすが啼く

ほととぎすが啼く

風の音

一

裏戸覗きやる

口笛や吹きやる

わたしや気が気ぢや

みられない

逢へる身ならば

逢ひにも出よが

元のわたしの
身ではない

二

戸縁とぶち叩きやる
小声ぢや呼びやる

とても気が気ぢや
ゐられない

空の星でも
縁なきや流る

薄い縁だと

おぼしやんせ

三

石は投げしやる
雨戸にやあたる

もうも気が気ぢや
ゐられない

この家^や去れとて
石投げしやるか

石に言はせに
来やしやるか

四

去つちやくれろと
石投ぎやしな

風の音だと
思やしやれ

風の音だと
よく言ゆふてくれた

窓にもたれて
泣いたぞえ

畑ン中

(ある農夫の歌の VARIATION)

真^{まつ}昼^{びる}間^まで^ごわ^{せう}畑^むン^{ぐら}中^らに^も、^ち田^む 鼠^ねが^い一^{びつ}匹斑^ふ犬^ぶに^ち掘^ほり^ぞへ^られ^て

イヤハヤ

むんぐらむんぐら居やあした

畑の土は、開闢このかた、黒いもんか

どなもんか

真^まの^{こと}所^と、烏^{くわ}に^き聞^きいて^み見^みや^あす^べい

畑ン中は、青空天上、不思議はごわすめえ

喉^{のど}笛^{ふエ}鳴^なら^した^{けー} ケー ケー ケー

鶏かしはが走つた

こりやまた事だと魂たまげ消払つて見てやあした。

蜻蛉あけづが一匹

追っかけ廻つた、啄つくわ 啄つくわ

ぶつ飛びあがつた、飛んだわ 飛んだわ

蜻蛉は御運ごうんでござりあした

地主様の一人娘が

娘に二種ふたいろ何処どこにごわせう

どどの詰りが

エヘン

孕み女子をなごになりやあした

畑はたけ中の豆まめ花はな何どなもんだ

朝つばらから何事なにごとぶたずに

べろりと咲いてござりやあす

道楽薬師

願ひかけました

よねやま
米山さまへ

縁をつないで

お呉れよとかけた

末はどうでも

お薬師さまよ

せつば詰つた

つないでお呉れ

帯で結んでも
切れる縁は切れる

どうせ米山も
お道楽薬師

切れるまでにも
つないでお呉れ

蚊喰鳥

春も末かよ
葉桜の

蔭に来てゐる
かくひどり
蚊喰鳥

友なつかしい

今日の日も

桜の蔭に

暮れて行く

桜の蔭の

たそがれが

なぜなつかしい

蚊喰鳥

また来よつばめ

月日立つのは

つばめの鳥よ

はやいものだ

さう思へ

南風吹きや

また来よつばめ

桜咲いたら

来よつばめ

南風吹きや

つばめの鳥よ

わしが待つぞと

さう思へ

千代の松原

千代ちよの松原

ひよろひよろ松よ

こぼれ松葉の

わたしぢやほどに

逢ひに来たのか

泣かせに来たか

逢ひに来たなら

出て逢ひませうに

泣けと云ふなら
わしや泣きませうに

唄で流して

横丁を通る

背戸山

狐や背戸山さ

来ちやコンと啼いた

背戸の松山の

松伐きつてしもと

狐や背戸山さ

来なくなつた

飛驒にて

山にや

毎日 寒い風吹くに

飛驒の高山

渡り鳥や

渡る

渡りなされよ

富山の 山にや

風は吹いても

まだ雪や

降らぬ

米山小唄

思ひつめたぞ

よねやま
米山さまよ

生きて暮らそと

恋路で死のと

わしの心も

こごなりや聞ぢや

どこで照る日も

照る日は同じ

故郷くにも捨てたぞ

この土地去るぞ

旅の身ぢやとて

旅の身ぢやとて

さうぢやとて

明日あすはわかれて

ゆく気がい

たづねて来よとて

さうぢやとて

このままわかれて

ゆく気かい

待つてて呉れとて

さうぢやとて

どうでもわかれて

ゆく気かい

小諸小唄

上州見おろし

浅間が山は

胸にほのほの

火を燃やす

□

二つ日はない

浅間が山よ

わしが願ひを

どうなさる

□

出船

沖は時雨よ
しぐれ

渚は雨よ

船は出船か
でぶね

みち汐か

汐はみち汐

港の船よ

時雨交りの
まし

風が吹く

浪枕

昨夜も君から
ゆふべ

来たたより

博多小女郎は
こぢよらう

浪枕

わたしも博多の

浪枕

ゆるしてお呉れと
いふたより

川しづき

さつさ行きましよ
ゆ

あの山越えて

花は咲けども

ふるさとの

月はおぼろに

川しづき

さつさ行きましよ

あの川越えて

花は散れども

ふるさとの

月はなつかし

川しづき

芙蓉の花

ふよう
芙蓉の花の

咲く頃にや

芙蓉の紅い

花が咲く

雀もお宿に

帰る頃にや

雀のお宿も

日が暮れる

おれもかうして

ゐるうちにや

おれも日暮れて

しまふだらう

いとどの虫

青い月夜だ

いとどの虫よ

かはらよもぎ
河原蓬は

うら
末から枯れる

青い月夜も

いつまで続く

鳴いてくれるな

いとどの虫よ

千羽鳥

生れ故郷の

ととかか
父母さまよ

けふ
今日もわたしは

糸とりながら

父と云ひました

母と云ひました

千羽鳥の

カホカホ声よ

父が恋しい

母なつかしい

薔薇の花さへ

一

薔薇の花さへ

真赤に咲くに

二度と歸らぬ

わかれた恋よ

夢か 涙か

流れの水か

わたしや口惜くやしい

捨てたか恋よ

二

薔薇の花さへ

真赤に咲くに

歸つて下さい

わかれた恋よ

夢も 涙も

流れの水も

わたしや口惜い

帰らぬ恋よ

三

薔薇の花さへ

真赤に咲くに

忘れられない

せつない恋よ

夢と 涙と

浮世の風に

わたしや口惜い

しほんだ恋よ

わたしや黒猫

一

わたしや黒猫

闇夜がすぎよ

寒いロシアへ

渡ろか 行^ゆこか

行こかロシアの

雪降る国へ

身まで売られた

わしや黒猫よ

二

風は 吹く吹く

港の沖に

寒いロシヤの

国吹く風よ

行こよ明日は^{あした}

ロシヤの国へ

どうせ売られた

わしや黒猫よ

三

鳥は空飛ぶ

空飛ぶ鳥よ

つれて行かぬか

ロシヤの国へ

ロシヤは恋しい

火を吐く国か

たよりすくない

わしや黒猫よ

同じ国なら

同じ国なら

故郷の人が

聞いただけでも

なつかしう思ふ

今の 今まで

忘れてゐたが

村の娘で

わしやゐた頃よ

思ひ出したぞ

涙の種を

暴風の夜

飲めよ コクテール

うたへよ 未来の歌を

赤く爛れた

二人のこころ

弾こか バラライカ

ロシヤの歌を

空は闇夜で

星さへ見えず

窓を ノツクする
暴風よ 雨よ

明日の夜明が
またれてならぬ

但馬山国

但馬山国

三日月さまも

山の蔭から

蔭へとはいる

山の蔭かよ

三日月さまは

但馬山国

恋の星月夜

春降る雪

何^なにが 不思議だ

春降る雪は ヨー

山の峰さへ

一^{いちや}夜で解ける

わしの扱^{しごき}帯も

春降る雪か ヨー

伊那いなに來た夜に
不思議に解けた

伊那の龍丘

伊那いなの龍丘たつをか

桃の花盛り

春蠶はるこ掃きませうか

籠口かごぐちチ乾そか

春蠶はるこ毛子けごになつた

日和はよいし

簇まぶしたたいて

桑摘み唄よ

霧ヶ岳から

霧ヶ岳から

朝立つ霧よ

霧を見てさへ

ちちはは
父母さまを

思ひ出されて

どうもならぬ

故郷恋しい

あの山蔭の

霧は消えても

父母さまを

思ひ出されて

どうもならぬ

かなしい海

ざんぶざんぶと

越後の海は

恋の海かよ

うみひよどり
海 鶉よ

はなればなれに
波々打つな

同じ海でも

越後の海は

ざんぶざんぶと

かなしい海か

はなればなれに

波々打つな

茄子畑

なすび
茄子やうれたかと

畑を覗きや

茄子やうれずに

まだ花盛り

ひよいと茄子の

木の下見たりや

蟻の行列ア

続いてる

運動踊り (四季の歌)

春

春の花かよ

桜の花は

春の花だよ

あの花は

チャチャラチャ

ヤツトサ

夏

夏の空かよ

夕立雲は

夏の空だよ

あの雲は

チャチャラチャ

ヤツトサ

秋

秋の月かよ

尾花の上に

秋の月だよ

あの月は

チャチャラチャ

ヤツトサ

冬

冬の風かよ

山吹く風は

冬の風だよ

あの風は

チャチャラチャ

ヤツトサ

宮城野小唄

□

さんさ時雨は

夜来ちや

降りやる

萱かやの枯れ穂に来ちや

降りやる

□

塩しほがまの塩しほがま金

石の釜

欲しや

鉄の鑄釜ぢや

塩アたけぬ

つばくらめ

浜^{はまちやう}町へ 来て幾年になるだらう

物干台の

つばくらめ

お前も旅の鳥だわネ

昨日^{きのふ}までなにも云はずにゐたけれど

わたしも旅の

鳥なのヨ

もうわたしや遠いところへ

ゆくんだよ

物干台の

つばくらめ

今日^{けふ}はわかれだ

泣かないか

お艶

お艶^{つや}が風呂にはいつてゐると

若い男が

だましに来た

小さい声でだましてゐる

お艶がざぶり湯をかけてやると

男はうろろうしてゐたが

裏から

すーつと逃げて行つた

馬うまやは厩うまやで

馬うまや堰ませんぼ棒ぼを

がらんがらんと鳴らしてゐる

天の川は北から西へ流れてゐた

旅の鳥

山に春雨

野に茅花つばな

花のかげかは

つばくらめ

去年常陸ひたちの

ふるさとの

山に來もした

つばくらめ

雨は降れども

つばくらは

花に寝もせぬ

旅の鳥

野にも山にも

春の日の

雨は糸より

細く降る

篠藪

ででむし
蝸牛よ

黙り腐つた

蝸牛よ

渦を巻いてる蝸牛よ

何が恋しい

篠藪に

さらさら さざと 雨が降る

ゆめうつつ
夢 現に

己^{おれ}は暮した

蝸牛よ

己に悲しいコスモスの

花と花とに雨が降る

もう己の

家は最終だ
をばり

蝸牛よ

田もいらぬ

畑もいらぬ

篠藪に

さらさら　さらと　雨が降る

萱の花

誰に見せうとて

髪結ふた

西の山には

萱^{かや}の花

誰に解かそと

帯締めた

東の山にも

萱の花

萱の枯れ葉に

だまされた

お綱さまはと

懸巢啼く

みそさざい

わたしの姉さんねえ

篠藪で

さつさ お背戸の

みそさざい
鶺鴒

誰にも言はずに

ゐてお呉れ

去年の暮にも

篠藪で

さつさ お背戸の

鶺鴒

誰にも言はずに

ゐてお呉れ

風に吹かれて

風に吹かれて

そよそよと

山の枯葉は

皆落ちた

木曾に木櫃きがやの

実はうれる

かへれ信濃の

旅鳥

茶の樹畑の

豆食べた

鳩は畑の

どこで啼く

荒野

花と云ふ花は咲けども

妻と云ふ

花は咲かない

おお 淋し

あれの
荒野の果てに

咲く花は

妻と云はりヨか

おお 淋し

風に吹かれて飛ぶ雲は

荒野の 果ての 野の 果ての

わたしに 何^なんで

恋しかろ

子安貝

渚の 渚の

子安貝

波 どんど

波 どんど

子安貝

けふ
今日から ふたりに

暮しませう

お前も

わたしも

子安貝

一軒家

姉は 男に

だまされた

野中の一軒家の

きりぎりす

機場に売られた

妹は

とんがらがん とんがらがん

暮してゐる

姉は 男に

だまされた

野中の一軒家の

きりぎりす

青い芒すすきに

降る雨は

ちんちりりん ちんちりりん

降りました

白露虫

かげろふの

あしたはまたぬ命だと

たよりは来たが

どうしよう

ひとつにはまたひとつには

かすかに白き

花でせう

しよんぼりとまたひとつには
さびしく咲いた

花でせう

かなしくもまたふたつには

涙に咲いた

花でせう

かげろふの

糸より細き命だと

たよりは来たが

どうしよう

雁

今朝も 南へ

下総しもふさの

雁かりが啼き啼きたちました

さらば さらばと

下総の

風の吹くのにたちました

親と別れた

故郷ふるさとの

空を見てゐた雁でせう

旅の身ゆゑに

下総の

風の吹くのにたちました

濡れ乙鳥

逢ひはせぬかよ

十六島で

潮来出島の

ぬれ乙鳥に

潮来出島の

ぬれ乙鳥は

いつも春来て

秋帰る

空飛ぶ鳥

赤いはお寺の

ひやくじつこう
百日紅

白いは畑の

そば
蕎麦の花

空飛ぶ鳥ゆゑ

巣が恋し

別れた子ゆゑに

子が恋し

ぼけ
木瓜の花咲く

ふるさとの
国へ帰れば
皆恋し

枯れ山唄

潮来出島の
いたこ
五月雨は
さみだれ
いつの夜の間
に
降るのだろ

枯れて呉れろと
枯れ山の
風は幾日

吹いただろ

常陸鹿島の

ひたち
かみやま

神山に

おれ
己が涙の

雨が降れ

土蔵の壁

わたしの胸の

恋の火は

いつになつたら

消えるだろ

かまど
竈の土は
かばいろ
樺色の
焰に燃えてをりました

君はたしかに

夕暮の

野に咲く花の

露でした

土蔵の壁に

あひあひ
相合の

傘にかかれてありました

夢き日

君のたよりの

来た日から

かなしい噂がたちました

水に流して呉れるとは

夢と思への

謎か知ら

走り書きだが

仮名文字で

「涙」と記してありました

水に流して呉れるとは

熱い涙の

ことか知ら

祇園町

友禅の 赤く燃えたつ

祇園町 ぎをんまち

銀の糸の

雨は斜ななめに降りしきる

渋色の 蛇の目の傘に

降る雨も

上に下にと降りしきる

鴨川の 河原に啼いた

河千鳥

君と別れた路次口に

雨はしきりと降りしきる

お糸

雑木林の

啄木鳥たくぼくてうは

杉の枯れ木を

啄ついて啼いた

杉の枯れ木を

啄木鳥は

無性むしやう やたらに

啄いて啼いた

掛けた襷の

解けたも知らず

涙うかべて

お糸は見てた

霜枯れ

裏の田^{たんほ}甫^ぼで

鳴^{しぎ}がゆふべ啼いた

ささげ畑の 暴^{あらし}風の晩も

君は忍んで 逢ひに来て

呉れた

裏の田甫で

鳴がゆふべ啼いた

鳴も田甫も霜枯れだけど

君は今夜もこよひ逢ひに来て

呉れよう

螢草

垣根の外に

来ては泣く

故郷ふるさとの

恋しい唄に聞きほれて

垣根の外に

来ては泣く

しもつけ
下野のはたば機場に

しほむほたるぐさ螢草

垣根の外に

故郷の

恋しい唄を

聞いて泣く

小室の小笛

裏戸覗いて 裏から

帰る

紺の前掛

麻裏草履
あさうら

あなた一人に

情立じやうてましよと

泣いて別れた

小室こむろの

小笹こささ

裏戸覗いて 裏から

帰る

紺の前掛

麻裏草履

芒の葉

「死なば共だ」と

新吉しんきちさんは

裏の お玉坊と

畑で泣いた

ウンニヤ 新吉さんは

小指の先を

細い芒すすぎの

葉で切りました

裏の お玉坊も

泣き泣き指を

共に芒の

葉で切りました

恋の日

春の名残なごりの

暮るる日に

紅き花さへ

惜をしみたり

夕べ 畑で

恋人を

待ちしも

今は昔なり

夏のをはりに

露つゆぐさ草の

白き花さへ

惜みたり

河原の岸で

恋人と

泣きしも

今は昔なり

西瓜畑

すゑくわばたけ
西瓜畑さ

お月さま出てる

そろりそろりと

お月さま出てる

土をたたいたら

どしんこ響いた

姉も妹も

おさらば ささらば

旅で暮らせば

旅で暮らせば

かやの
茅野の

雨も

さらり ささらりと

身にしみる

さらり さらりと

茅野の

雨は

さらり さらりと

身にしみる

沙の数

潮がれ浜で聞く唄は

みんな悲しい

唄ばかり

沙の数ほどかぞへても
別れた人は
帰らない

涙ぐましくなつて来て
泣かずに 泣かずに
ゐられよか

昔の月

お前と逢うた

武蔵野に

青い 昔の 月が出た

お前も 見たろ

武蔵野の

畑の中に家が建つ

畑の 中の 夕雲雀ゆふひばり

もう おれは

故郷くにへ帰るぞよ

帰らぬ人

川の向うで

水鶏くひなが 啼いた

帰りやんせ

帰りやんせ

月も おぼろに

河原さ出てる

帰りやんせ

帰りやんせ

きつと忘れて

ゐるんだよ

片恋

恋しくて

裏へ出て見りや
青い空

はかない
わたしの
かたこひ
片恋よ

はかない
わたしに
なぜ
何故したの

あらうみ
荒海のやうな
こころに

何故したの

煙草の花

お蔭^{つた}嫁^たさま

煙^{たばこ}草の花は

元の男の 畑に咲いた

お蔭^{つた}嫁^たさま

もう 諦^{あきら}めた

何にも縁^{ゆかり}だと もう諦^{あきら}めた

切れた障子の

穴から見たら

後向きして糸繰りしてる

石地蔵

学校先生よ

石地蔵さまも

赤い涎掛よだれかけ

かけてゐる

烏ア欲しくて

涎掛見てる

学校先生よ

何なじよにしなしなぺ

櫛

裏の川端の
さらさら蓬よもぎ

思ひ返して

みる気はないか

今朝けさも 裏戸に

櫛かみが落ちてゐた

通つて来たのか

可哀想なものだ

葛飾の夏

卯の花が散る

ほととぎす
時 鳥が啼く

沼の中に

あやめ
菖蒲の花も咲いてゐる

沼の中の

菖蒲の花よ

葛飾に

ふたつき
今一二月もゐたかつた

家も屋敷もない
おれ
己は

去年の夏は東京に

今年の今は葛飾に

わかれねばならぬ時が来た

この住み馴れた

葛飾の

菖蒲の花よ

また逢はう

港の時雨

蛇の目傘に

時雨が降るに

月日かぞへて

港を見てる

待つはつらかる
待たるる身より

ふしきみなと
伏木港の

船頭さん達よ

蘆枯れ唄

蘆が枯れたら

どこで逢ひませう

前の河原は

石まで枯れるし

蘆が枯れたら

どこで逢ひませう

裏の畑は

土まで枯れるし

蘆が枯れたら

どこで逢ひませう

蘆の枯れ葉の

蔭で逢ひませう

おけらの唄

おけらの唄の
さびしさに
窓にもたれて
すすり泣く

まぼろし草さうも
コスモスも
花は昔の
ままで咲く

おけらの唄の
さびしさに
畳の上に
伏して泣く

鶉

今日も鶉つぐみが

丘に来て啼いた

おれも泣きたい 鶉の鳥よ

空は乳色に

また日が暮れる

死んで別れた

人ではないし

忘れようとして 忘らりよか

錆

窓の格子によりかかり
「いつまた来るの」と

泣く女

錆た庖丁の かなしくも

「はかない身だよ」と

さうか知ら

ただ明易い 夏の夜の

街はあかるい

青すだれ

磨といでも磨いでも 庖丁の

鏝は磨いでも
さうか知ら

夕の月

お仲なかあね姉さま

畑の中で

しやなりしやなりと

麦踏みしてる

雁かりは帰るし

夕ゆふべの月は

櫛くぬぎぼやし林の上から

出てる

つまらないよと

涙で言ふた

お仲姉さま

丸顔だつけ

スイツチヨ

スイツチヨスイツチヨと

大阪の

街のはずれで鳴くスイツチヨ

姉は筑紫の

長崎へ

妹も筑紫のいもと

長崎へ

スイツチヨスイツチヨと

蔦の葉の

上にとまつて鳴くスイツチヨ

おけら

左官が 左官が

蔵建てた

おけらが三匹

出て鳴いた

大工が 大工が
家建てた

お月さん ぽかんと
眺めてる

女工唄

雨の降る日は
雨だれ

小だれ

何^なにも恋しくないが
公休日^なが恋し

空の弁当箱

雨だれ

小だれ

腹の減るたび

故郷くにの親思ふ

いやな監督さんだ

雨だれ

小だれ

何にも恋しくないが

公休日が恋し

かかれかかれと

モーターが廻る

なにもかかりませうか

雨だれ

小だれ

釜山にて

牧^{まぎ}の島から

対馬^{つしま}が見ゆる

最早対馬も

春だろに

海にや海霧

朝から立ちやる

対馬見るなの

霧ぢややら

鼬

^{いたち}
鼬ア騒ぐから

背戸へ出て見たりや

烏ア河原で

水浴びしてた

山の頂上にや

薄雲かかる

今夜 山から
雨ア降るか

娘と劉さん

I

娘

劉^{リウ}さん

赤ん坊^ほが生れたならばどうしませう
どこ
何処^{どこ}へたのんで育てませう

劉

ワタシ ワカラナイ アナタ スル ヨロシ

娘

横浜の叔母さん所へ遣りませう

新しいひとつみ身ひとつの一も着せて遣りませう

II

娘

叔母さんに断られたらどうしませう

劉

ワタシ　クニ　トホイ　ワカリマセン

娘

悲しいけれど捨てませう

顔の見えない闇の晩

ミルクの管をくく哺ませて——公園のベンチの上に捨てませう

III

娘

お月夜の晩であつたらどうしませう
お月夜が続いて居たらどうしませう
育てませうか捨てましよか

劉

ワタシ ニホン タツ アナタ タノム

娘

薄情な 薄情な 劉さん

思ひ切つて——悲しいけれど捨てませう
ベンチの上に青青と月がさしたら泣くでせう
わたしの顔をきつと眺めて泣くでせう

劉さん

劉さん

その時のわたしの心はどんなでせう

青空文庫情報

底本：「定本 野口雨情 第一巻」未来社

1985（昭和60）年11月20日第1版第1刷発行

底本の親本：「雨情民謡百篇」新潮社

1924（大正13）年7月14日刊

初出：紅殻とんぼ「婦人世界」

1924（大正13）年7月

捨てた葱（原題 葱）「日本詩集 一二二五版」

1925（大正14）年4月

青いすすぎ（原題 細いすすぎ）「婦人世界」

1924（大正13）年5月

波浮の港（原題 ハブの港）「婦人世界」

1924（大正13）年6月

海の遠く「少女倶楽部」

1924 (大正13) 年6月

謎 (「甚吾さん」の全面的改作) 「沙上の夢」新潮社

1923 (大正12) 年4月刊

草刈り娘 (原題 草刈り唄) 「婦人倶楽部」

1924 (大正13) 年5月

金雀枝 (原題 金雀枝の花咲く頃) 「郷土」

1923 (大正12) 年5月

風の音 「婦人倶楽部」

1924 (大正13) 年3月

畑の中 「都会と田園」 銀座書房

1919 (大正8) 年6月刊

蚊喰取り 「令女界」

1923 (大正12) 年5月

また来よつばめ 「極楽とんぼ」 黒潮社

1924 (大正13) 年1月刊

千代の松原「極楽とんぼ」黒潮社

1924（大正13）年1月刊

米山小唄「極楽とんぼ」黒潮社

1924（大正13）年1月刊

旅の身ぢやとて「極楽とんぼ」黒潮社

1924（大正13）年1月刊

小諸小唄（第二聯を全面的に改作）「極楽とんぼ」黒潮社

1924（大正13）年1月刊

出船「極楽とんぼ」黒潮社

1924（大正13）年1月刊

浪枕「極楽とんぼ」黒潮社

1924（大正13）年1月刊

川しづき「沙上の夢」新潮社

1923（大正12）年4月刊

いとづの虫「極楽とんぼ」黒潮社

1924 (大正13) 年1月刊

千羽鳥「極楽とんぼ」黒潮社

1924 (大正13) 年1月刊

薔薇の花さへ「極楽とんぼ」黒潮社

1924 (大正13) 年1月刊

わたしや黒猫「極楽とんぼ」黒潮社

1924 (大正13) 年1月刊

同じ国なら「極楽とんぼ」黒潮社

1924 (大正13) 年1月刊

暴風の夜「極楽とんぼ」黒潮社

1924 (大正13) 年1月刊

但馬山国「極楽とんぼ」黒潮社

1924 (大正13) 年1月刊

春降る雪「極楽とんぼ」黒潮社

1924 (大正13) 年1月刊

- 伊那の龍丘「極楽とんぼ」黒潮社
1924（大正13）年1月刊
- 霧ヶ岳から「極楽とんぼ」黒潮社
1924（大正13）年1月刊
- かなしい海「極楽とんぼ」黒潮社
1924（大正13）年1月刊
- 運動踊り（題名に「四季の歌」を追加）「極楽とんぼ」黒潮社
1924（大正13）年1月刊
- つばくらめ「極楽とんぼ」黒潮社
1924（大正13）年1月刊
- お艶（「わしの隣人」から）「都会と田園」銀座書房
1919（大正8）年6月刊
- 旅の鳥（一部改作）「別後」交蘭社
1921（大正10）年2月刊
- 篠藪（「己の家」から）「都会と田園」銀座書房

1919 (大正8) 年6月刊

萱の花「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

みそざざい「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

風に吹かれて (原題 烏) 「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

荒野「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

子安貝「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

一軒家「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

白露虫「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

雁「別後」交蘭社

1921（大正10）年2月刊

濡れ乙鳥（原題 乙鳥） 「別後」交蘭社

1921（大正10）年2月刊

空飛ぶ鳥「別後」交蘭社

1921（大正10）年2月刊

枯れ山唄「別後」交蘭社

1921（大正10）年2月刊

土蔵の壁（一部改作） 「別後」交蘭社

1921（大正10）年2月刊

夢き日「別後」交蘭社

1921（大正10）年2月刊

祇園町「別後」交蘭社

1921（大正10）年2月刊

お糸「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

霜枯れ「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

螢草「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

小室の小笹「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

芒の葉「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

恋の日「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

西瓜畑「沙上の夢」新潮社

1923 (大正12) 年4月刊

旅で暮らせば「沙上の夢」新潮社

1923 (大正12) 年4月刊

沙の数「沙上の夢」新潮社

1923（大正12）年4月刊

昔の月「沙上の夢」新潮社

1923（大正12）年4月刊

帰らぬ人「沙上の夢」新潮社

1923（大正12）年4月刊

片恋「沙上の夢」新潮社

1923（大正12）年4月刊

煙草の花「沙上の夢」新潮社

1923（大正12）年4月刊

櫛「沙上の夢」新潮社

1923（大正12）年4月刊

葛飾の夏（原題 己の家 十、夏）「都会と田園」銀座書房

1919（大正8）年6月刊

港の時雨「沙上の夢」新潮社

1923 (大正12) 年4月刊

蘆枯れ唄「沙上の夢」新潮社

1923 (大正12) 年4月刊

おけらの唄「沙上の夢」新潮社

1923 (大正12) 年4月刊

鶉「沙上の夢」新潮社

1923 (大正12) 年4月刊

鏝「沙上の夢」新潮社

1923 (大正12) 年4月刊

夕の月「沙上の夢」新潮社

1923 (大正12) 年4月刊

スイツチヨ「沙上の夢」新潮社

1923 (大正12) 年4月刊

おけら「別後」交蘭社

1921 (大正10) 年2月刊

女工唄「別後」交蘭社

1921（大正10）年2月刊

娘と劉さん「都会と田園」銀座書房

1919（大正8）年6月刊

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：noriko saito

2010年5月18日作成

2011年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雨情民謡百篇

野口雨情

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>